

相 続 税 法

web限定フォローアップセミナー

～ 応用理論対策 ～

1 理論問題の種類

理論問題には個別問題・応用問題・事例問題の3つがある。各問題の特徴は次のとおりである。

- (1) 個別問題とは、問題に対して1つの規定を解答する形式である。
- (2) 応用問題とは、問題に対して複数の規定を解答する形式である。
- (3) 事例問題とは、具体的な状況が与えられ、その状況において想定される規定を解答する形式である。

2 本試験における理論の出題傾向

近年の本試験における理論は、応用理論及び事例理論の2題出題が主流となってきた。このうち応用理論については、問題文の読み取りが難しいものが多い。そのため、応用理論の問題文に対するアプローチ及び解答の導き方のアプローチを身に付けることが重要となってくる。

3 応用理論問題について

応用理論は、問題文のテーマについて関連する複数の規定を解答として記述する必要があるため、応用理論に対する基本的な考え方を身に付ける。

なお、応用問題を読み解くにあたって、解答範囲の限定上、次のような項目について確認すること。

(1) 法律の種類及び税目からの限定

相続税法は一税法二税目であること、また、相続税法の他に、租税特別措置法との関連性も強いことから、税目による限定又は法律による限定が行われることがよくあるため、下記の《具体例》により、その範囲を確認してもらいたい。

例えば、「相続税法上」といった場合には、基本的に租税特別措置法について触れる必要はないことになるが、相続税法に定められていることについては、相続税に関する規定であるか、贈与税に関する規定であるかを問わずに対象とするということである。さらに、取得原因に着目することも考えられ、相続・遺贈・贈与といった語句にも注意しなければならない。また、贈与については暦年課税贈与と相続時精算課税贈与があるため、両方とも考慮するのか、片方だけでよいのかも考えることとなる。

なお、申告手続関係の理論については、国税通則法も念頭において解答範囲を考えること。

《具体例》

	相続税	贈与税	
相	A	B	イ 相続税又は贈与税の制度上、～ ⇒ A + B + C + D
法			ロ 相続税法上、～ ⇒ A + B
措			ハ 相続税の制度上、～ ⇒ A + C
置	C	D	ニ 贈与税の制度上、～ ⇒ B + D
法			ホ 税法上、～ ⇒ A + B + C + D
			ヘ 相続税法上、相続税の～ ⇒ A

(2) 計算に関する規定（実体規定）と手続に関する規定（手続規定）による限定

解答範囲の限定方法は、その規定が「課税価格計算上の取扱い」なのか、「税額計算上の取扱い」なのか、そのような限定がないのかという形式もある。

《具体例》

	課税価格計算	X	
実体規定	税額計算	Y	イ ～の制度上、～ ⇒ X + Y + Z
			ロ 課税価格の計算上、～ ⇒ X
手続規定	手続	Z	ハ 税額の計算上、～ ⇒ X + Y
			ニ 手続上、～ ⇒ Z

また、「～の課税上の取扱い」などと問われた場合には、「手続規定」を含めるか否かという問題が生ずるが、基本的には広義に解釈して手続規定も記述することが望ましいが、時間との兼ね合いを考慮する必要がある。

(3) 問題からテーマを読み取る

応用理論は、まず第一に問題文から主題となるテーマを見抜くことが重要となる。テーマは色々な設定が考えられるが、過去の本試験の傾向から、主に次のようなテーマを整理しておくが良い。

- ① みなし財産関係
- ② 対象者別の関連規定
- ③ 災害関係
- ④ 相続税と贈与税の関係
- ⑤ 公益の関連規定
- ⑥ 課税価格算入額の関連規定
- ⑦ 申告等の関連規定
- ⑧ 納付の関連規定

このようなテーマが与えられたら、そのテーマに沿って解答することとなるため、各テーマにおける考え方を身に付けていくこととなる。

4 対象者別の関連規定の具体例

相続人の地位にある者が相続の単純承認をした場合と相続の放棄をした場合とでは、相続税及び贈与税の取扱いがどのように異なるか。その異なる事項を挙げて説明しなさい。

【解 答】

- (1) 生命保険金等又は退職手当金等の相続税の非課税
- (2) 債務控除
- (3) 立木の評価
- (4) 未分割遺産に対する課税
- (5) 相続税額の加算
- (6) 相次相続控除
- (7) 農地等についての相続税の納税猶予等
- (8) 相続税及び贈与税の期限内申告書の提出義務の承継
- (9) 相続時精算課税に係る相続税の納付義務の承継等
- (10) 相続時精算課税選択届出書の提出の承継等
- (11) みなし相続、遺贈財産の取得原因

5 相続税と贈与税の関連の具体例

相続時精算課税に係る贈与税の取扱いについて説明しなさい。

【解 答】

- (1) 相続時精算課税の選択
- (2) 相続時精算課税に係る贈与税額の計算等
- (3) 相続時精算課税選択届出書の提出の承継等
- (4) 住宅取得等資金の贈与を受けた場合の（相続時精算課税の）特例
- (5) 贈与税の期限内申告

⑥ 応用理論問題の解答の書き方

(1) 解答範囲とボリューム

応用理論の解答は、関連する規定を洩れなく挙げるのが大切である。思い浮かんだ規定から順に、規定の細部まで書き過ぎてしまうと、時間や答案用紙の面から関連規定を網羅できなくなったり、主となる解答項目が洩れてしまう可能性がある。したがって、応用理論の主題となるテーマに沿った解答項目を把握することや、問題文で問われている解答項目を法体系等を基本に導き出すことが重要となってくる。そのため、規定を条文体系等によりしっかり整理しておきたい。応用理論では、問題のテーマに対しメインとなる規定を中心に、関連規定を網羅することが重要である。答案用紙を埋めた量がそのまま得点に結びつくとは限らないということを念頭においてほしい。

(2) 解答の見直し

理論は、解答を終えたら、自分の書いた理論が意味の通る内容であるか、税法用語や適用対象者、結論などに誤りがないかどうか、速読の要領で必ず見直すこと。理論では、結論などを書き間違えた場合には、大失点につながる可能性がある。特に、本試験では、覚えた多くの理論の中からいくつかを解答するため、複数の理論が1つの文章の中に混在してしまうことがある。自己の解答を過信せず、1、2分でも目をとるようにしてほしい。